尾道商業会議所記念館
第２９回企画展示解説

2016 年 2 月 5 日～ 2016 年 7 月 6 日

テーマ　尾道と住友の歴史再縁スペシャル～住友家と尾道～

尾道商業会議所記念館、開館 10 周年記念企画展示

尾道と住友の歴史再縁

商都尾道の歴史と風格を今に伝える尾道商業会議所記念館の建物は、遡ること 1923（大正 12）年の建造で、今年で 93 年の時を刻む。尾道商工会議所の前身である尾道商業会議所が開所したのは、更に遡って 1892（明治 25）年のことで、それは全国で 30 番目という早い時期の開所であった（前年に広島商業会議所が開所）。

尾道商議所が開所したこの前後の時期は、山陽鉄道、即ち現在の山陽本線が尾道に敷設（1891（明治 24）年に尾道駅開業・1892（明治 25）年に糸崎まで延伸）されるという、尾道の近代史上最大の事象が見られた時期でもあった。

中世以来の商港として知られた尾道に、海の路（みち）に加え新時代の陸の路もここに備わることで、海陸交通の要衝・ポイントとして、商都のポテンシャルや存在感は更なる高まりを見せることになる。

この海路と陸路の結節を踏まえ、更なるビジネス・チャンスを企図したのが、明治初年の段階で既に尾道に足場を設けていた住友家であった。尾道まで鉄道が延伸した翌年の 1892（明治 25）年、出張所の扱いであった住友の尾道分店は支店に格上げされると同時に、住友が事業の核とする愛媛県新居浜市所在の「別子（べっし）銅山」と、住友本店地の大阪を繋ぐルートにおいて、尾道は重要な連絡中継地点となったのである。

その要地において数年後、別子銅山と住友本店からそれぞれ重役が参集し、新しい時代に対応した金融業として、銀行設立を決議。住友銀行はここに産声を上げた。これによって尾道は、住友銀行が発祥する歴史的な土地ともなった。

銀行業へ参入後間もなく、前述の住友家尾道分店の地から更に東、尾道市役所前の通りに住友銀行の支店建物が新築されるが（1904・明治 37 年）、これを手掛けたのが、日本建築史にその名を残す建築家・野口孫市らが属した住友の臨時建築部であった。それから百年以上の時を経た今、住友臨時建築部を前身とする日建設計の手によって、尾道市役所の新庁舎が設計されようとしており、まさに時を超えた歴史的再縁が紡がれようとしている。

第 27 回の序幕展示（尾道と住友の歴史再縁～野口孫市と住友建築部）に続いて、尾道と住友の歴史再縁を、ここに改めて辿ってみたい。

初代住友総理事・広瀬宰平

２代住友総理事・伊庭貞剛

（写真提供・住友史料館）

近代住友のキーマン～広瀬宰平（ひろせ さいへい）と伊庭貞剛（いば ていごう）～

別子銅山の近代化と銀行業への参入と、住友の近代化草創期を語る上で外せない人物（キーマン）が、初代住友総理事となった広瀬宰平（ひろせ・さいへい）、広瀬後継として総理事 2 代目を引き継いだ伊庭貞剛（いば・ていごう）であった。

◆　広瀬（ひろせ）　宰平（さいへい）　（1828・文政 11 年～ 1914・大正 3 年）

滋賀県野洲市の旧家・北脇家の次男として出生。9 歳の時に別子銅山の支配人を務めていた叔父（北脇治右衛門）の養子となって別子へ移住、11 歳から銅山で奉公することになる。28 歳になった頃、住友家第 10 代家長（当主）・住友吉左衛門から推薦され、住友の江戸店支配方を務めた広瀬義右衛門の養子に迎えられた。そして 38 歳の若さで別子銅山を統括する支配人の任に就く。今の小学生時分から銅山に身を置き、酸いも甘いも肌身をもって経験して来ただけに、まさに叩き上げである。

明治維新後、その存在は新政府の目にも留まり、鉱山を専門に扱う役人に抜擢され、その視察先で出会った御雇い外国人（フランス人）から、火薬を用いた近代的な採鉱法を学び、進んだ西洋技術の導入が必須であることを痛感するに至った。そして別子銅山こそが、住友の事業の中核を成すものであることを再認識する。こうして役人仕事に早々見切りをつけると、広瀬は別子銅山の近代化へ一点集中してゆく。広瀬を上回る（広瀬の給与の 6 倍）高給待遇でフランス人技師（ラロック）を招聘して近代化へのプランを描かせ、次いで日本人技師の養成を目論み、外務省から通訳として引き抜いた塩野門之助と店員（増田芳蔵）をフランスへ留学させるなど、次々と一手を打っていった。かくしてその先見性と叩き上げの努力と踏ん張りによって、

住友の経営を統べる初代の総理事（実質の最高経営責任者）に任命された。

「逆命利君、謂之忠」…命に逆らっても君を利す、これを忠という

例え上司や主君の命令であっても、それが為にならない事であれば、あえて逆らうこともある、それこそが忠義である…という意を持つ言葉で、中国の古典「説苑」の内に出てくるもので、広瀬が終生座右の銘とした言葉であった。即ち、イエスマンばかりでは危ういという戒めが込められており、それが会社にとって利にならない、マイナスであると思うのなら、立場の上下に関係なく、はっきりノーを突きつけられるような人材こそが大切であると広瀬は教えており、実際に広瀬が登用した人材は、続く伊庭貞剛然り、その教えに則ったものになっていた。

◆　伊庭（いば）　貞剛（ていごう）　（1847・弘化 4 年～ 1926・大正 15 年）

滋賀県近江八幡市出身。母親（北脇田鶴子）が広瀬宰平の姉という関係。明治元年から京都御所勤めに入り、次いで司法の役職を歴任し、函館裁判所副判事、大阪上等裁判所に奉職。自身の思うところとは異なる官職に見切りをつけた後、叔父である広瀬のもとを訪ねた際に住友入りを勧められ、1879（明治 12）年入社。この時 33 歳。

住友大阪本店の支配人となり、広瀬の片腕として業務に邁進。

1893（明治 26）年 5 月、新居浜の精錬所から排出される煙害が問題化し、被害を被った周辺農民が暴動を起こす事態となり、伊庭は単身で別子銅山支配人として現地入りし、事態の解決に向けて、まさに命を張った勢いで奔走することになる。そこでは現場から離れた所での机上だけではいけないと、銅山にも足繁く通い、労に従事する作業員と交わった。

煙害問題解決では、補償処置では根本的な解決にはならないと判断し、製錬所の所在を別子山中から新居浜沖に浮かぶ無人島（四阪島）へ移す一大計画を実行。また、緑を失い荒れた別子の山の再生にも着目し、植林事業が一層の充実加速を見、伊

庭の別子着任まで平均6万本であった年間の植林数は100万本に達する。その他、山から排出される鉱毒水を川に流さない為に、山中から新居浜海岸までの間（全長 16 km）に坑水路（レンガ製）を築造、鉱毒の中和処理施設の設置など、環境保全にも手腕を発揮した。特に植林事業は、伊庭が「わしの本当の事業」と述懐したほど。環境への配慮と保全の眼差しは、現代にも通じる先見性であったといえる。尚、この伊庭が力を掛けた植林事業は、今日の住友グループ系列企業の一つ、住友林業の出発点ともなった。

住友の銀行業参入を先頭に立って推進し、尾道で開かれた同会議では議長を務め、銀行設立への立役者の一人となった。1900（明治33）年、2代目総理事に就任。

※　四阪島製錬所

1897（明治30）年2月に着工され、1905（明治38）年1月より操業を開始。これにより煙害は解決されたかと思われたが、風にのって予想外に周辺地域に飛散する結果となり、再び壁にぶち当たる事になる。この克服は伊庭の没後も長く続き、1939（昭和14）年に亜硫酸ガスの中和に成功し、実に34年目にして煙害問題は終結する。

銀行以前と住友の原点・別子銅山

1873（明治6）年、住友が尾道に分店（出張所）置いた背景にあるのが、芸予の海を挟んで島向こうの対岸に位置する愛媛県新居浜市の別子銅山であった。

別子銅山は江戸時代の1691（元禄4）年、幕府から採掘権の許可を得た住友によって採掘事業が始まり、閉山する1973（昭和48）年3月までの約280年間、65万トンにも及ぶ銅を産出した世界最大級の銅山として知られた。

銅山に従事する人々とその家族関係者ら約3800人（最盛期）が生活したその跡は、歴史・産業遺産として今に伝承され、また、標高750mの山中に広がった空中都市から、東洋のマチュピチュ（南米アンデスに見られた空中都市）とも称され、現在では観光スポットとしても親しまれている。

別子銅山から産出された銅は、新居浜沖に浮かぶ四阪島（しさかじま・行政区分では今治市宮窪町域）へ運ばれ、島に設けられた精錬所で製錬がなされた。以前の製錬施設は新居浜市の内にあったが、公害問題を受けて1905（明治38）年に無人島だった四阪島へ移された経過で、現在は後身となる住友金属鉱山が操業を続けており、関係者以外の島への上陸・立ち入りは禁止されている。

後の住友財閥、今日の住友グループの源流となるのがこの別子銅山であり、住友金属鉱山はもとより、住友重機械工業、住友化学、住友林業などのグループ企業の大半が、銅山事業から派生して生まれ、今日へと受け継がれている。

別子銅山は住友の原点であると同時に、日本の近代化、工業史においても大きな位置づけを持つものである。

この別子銅山と大阪の住友本店を繋いだ中継基地こそが尾道であり、尾道は海と陸双方に通じる交通上の要地であった。加えて商都として尾道の持つ経済力（政治は広島、経済は尾道と称され、当時は経済面では広島市よりも上位だった）にも重きを置かれた上での分店、次いで支店の開設であった事は言うまでもないだろう。

銀行創設を決めた「尾道会議」

1895（明治28）年5月4日、大阪の住友本店、別子銅山のそれぞれの重役が尾道の地に参集した。前者は延伸されて間もない山陽鉄道の汽車で、後者は新居浜から汽船で尾道を目差した。土堂町の住友家尾道支店（現在の三井住友銀行尾道支店と同位置）の一室で開かれた会議では、9つの議題が諮られたが、その主題を成したのが「住友銀行ヲ興ス事」、即ち銀行設立に向けての審議だった（翌5日にまたがる）。

会議に臨んだのは、伊庭貞剛以下6名（＋1名居たが所用により欠席）。議長は広瀬引退後の住友を取り仕切った伊庭が務めた。住友史料館に遺るその議事録「第一回住友家重役会決議録」には次の通り記録されている。

住友銀行ヲ興ス事

左ノ如キ理由アルヲ以テ之（これ）ヲ興スノ必要アル事ヲ一同是認セリ

一　貸金事業追々盛大トナルニ付テハ性質上銀行ト為スヘキコトヲ相当トスル事

二　貸金取引ノ区域拡張且繁多トナルニ付テハ規律益厳整ヲ要スコレガ為メニハ政府ノ保護監督ノ下ニ属スル法律上ノ銀行ト為ス方目的ヲ達スルニ便ナル事

三　諸銀行トノ為替或イハ割引等ヲ為スニ便ナルコト

四　収利ノ増加スル見込アルコト

五　事業ヲ拡張整理スルノ挙ニ出ツルコトナレバ世上ノ信用ハ益加ハルベキコト

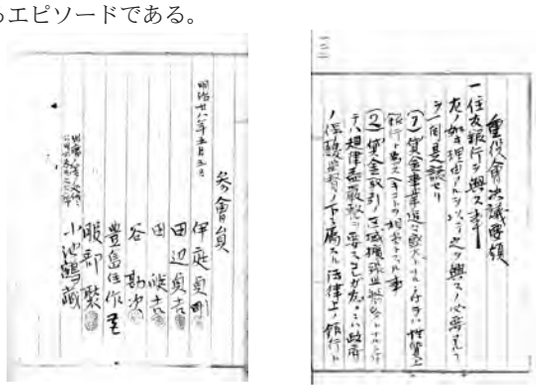
六　預リ金等ハ成ベク有価証券等ニ代ヘ飽迄手堅キ方法ヲ取レハ危険ノ憂ナクシテ幾分カ利益ヲ増ス事

決議録は家長・住友友純へ上げられ決済を得、同年7月に大蔵大臣の認可を受け、ここに住友銀行の設立が決した。資本金は100万円で、これは本店の88万円、神戸支店の10万円、尾道支店の2万円を合計した金額になる。

大阪本店、神戸支店、川口と兵庫の出張所に続いて、同年12月1日に尾道支店は開設され、初代支店長は上村喜平、上村支店長以下7名の体制で出発した。

尾道支店の所在は住友家尾道支店に同じくであったが、1904（明治37）年に銀行街であった久保町の米場町通りへ移転新築。界隈には広島銀行の源になる国立第六十六銀行も所在した。1938（昭和10）年に再び現在地の土堂へ戻り（新築して再移転）、三井住友銀行尾道支店として今に続いている。

以上の経過から、尾道は住友銀行が発祥する歴史的な場所であったと位置づけられ、尾道でのこの重役会議は、後に「尾道会議」と通称されることになる。因みに既に引退していた初代総理事の広瀬は、銀行設立には難色を示していたが、伊庭はこれを説得して推し進めた。広瀬が言い聞かせた「逆命利君、謂之忠」の信念は、伊庭へとしかと受け継がれていたことを偲ばせるエピソードである。



第一回住友家重役会決議録

住友史料館所蔵

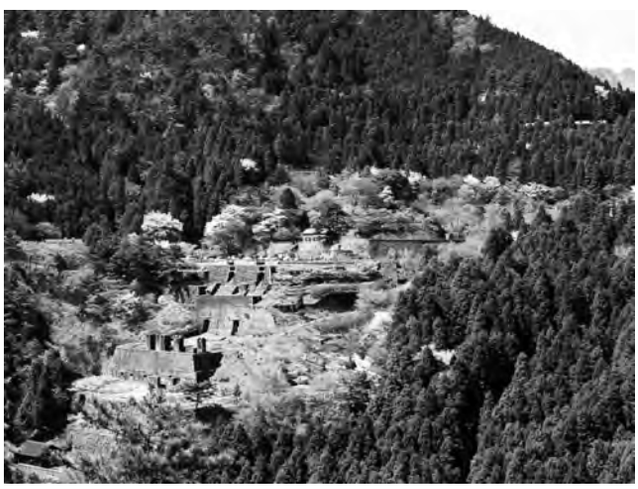
別子銅山と四阪島製錬所

別子鉱山図

住友史料館所蔵

四阪島製錬所

住友史料館所蔵



現在の別子銅山の様子

住友臨時建築部から日建設計へ

米場町に現存する旧・住友銀行尾道支店建物の設計・施工を手掛けたのは、住友本店臨時建築部であった。その名称の通り、住友銀行大阪本店の建築にあたって組織され、その完成をもって解散する臨時部門として、1900（明治 33）年 6 月 1 日に発足した。

大阪市北区中之島の堂島川沿いに所在した徳島藩の蔵屋敷跡に事務所が構えられ、その門前で撮られた当時の記念（ 集合）写真には、職員 26 名が写り、前列左から 3 人目が技師長として建築部を率いた建築家の野口孫市（のぐち・まごいち）であり、その右隣（ 左から 4 人目 ）も建築家として名を残す日高胖（ひだか・ゆたか）の若かりし頃で、この二人が建築部草創期のキーマンであった。因みに野口や日高を除く職員中 14 名は、現在の工学院大学の前身となる工手学校（ 日本初の私立工業実業学校 ）の卒業生で占められていた。

臨時建築部の初仕事は実際には銀行本店ではなく、神戸に所在した住友家の須磨別邸（1903・明治 36 年建造、戦災で現存せず）、次いで大阪図書館（ 現在の大阪府立中之島図書館 ）であった。住友家の寄贈により 1904（明治 37）年に完成した中之島図書館は、その歴史的価値の高さから国の重要文化財に指定される。

その後も住友関連施設の設計・建造を手掛け、その実力を住友内外に知らしめた臨時建築部は、1911（ 明治 44）年に住友総本店営繕課に改組される事によって、臨時的組織から常設組織へと昇格した。住友ビルディング（ 住友大阪本店建物 ）建設時期には住友合資会社工作部となり、その後一時期、住友から離れて独立した建築事務所となるも、終戦直前に再び住友に復帰し、戦後には日本建設産業と社名が改まり、1950（ 昭和 25）年より日建設計工務株式会社、そして 1972（昭和 47）年より株式会社日建設計として現在に至っている。

日建設計は著名な建造物を数多く手掛けており、近年では東京スカイツリーも同社の設計。尾道市の市役所新庁舎も日建設計により手掛けられ、建築部による尾道支店新築から時を経て、尾道と住友の歴史的再縁がここに描かれようとしている。

住友銀行尾道支店の建物の変遷

土堂町の初期建物

住友史料館所蔵

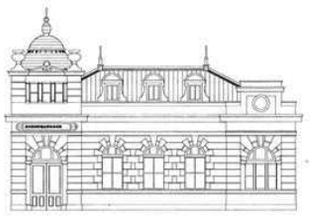
米場町建物の増築

住友史料館所蔵

土堂町へ新築再移転

尾道学研究会蔵

1904（明治 37）年の新築当初



1909（明治 42）年の増築後

『広島県の近代化遺産』総合調査報告書（広島県教育委員会）
西川龍也氏（福山市立大学教授）作成

建物の現状。石造風に見えて木造建築
銀行移転後はカフェ、海運局を経て尾道市の所有

尾 道 近 代 史 年 表

1871	明治 4	浜問屋によって港の浚渫（しゅんせつ）実施
1872	明治 5	土堂本通りに郵便取扱所（現在の尾道郵便局）開設
		尾道町が広島県第十大区（御調）第一小区となる
1873	明治 6	尾道－広島間に電信が開通し、久保新地に尾道電信分局設置
		尾道に生糸工場開設
		久保小学校の前身となる小学温柔舎が天寧寺境内に開設される
		住友家尾道分店（後の住友銀行の前身）開設
1874	明治 7	尾道に広島県支庁を設置
		尾道港で広島－大阪間の蒸気船の寄港が始まる
		後地（うしろじ）村が尾道町へ合併
1877	明治 10	西南の役で、西郷隆盛決起の報が尾道電信分局から中央へ発信される
1878	明治 11	尾道初の銀行として国立第六十六銀行開設（広島銀行の前身）
1879	明治 12	三軒家町に牛馬の寄合市が開かれる（後の尾道家畜市場）
		尾道町を尾崎・久保・十四日・土堂に分ける
		国立第六十六銀行（広島銀行の前身）開設
1881	明治 14	尾道水上警察署設置
		尾道家畜市場開設
1884	明治 17	大阪商船会社の定期船が尾道港へ寄港開始
1888	明治 21	尾道商業学校（後の県立尾道商業高校）開校
		尾道港の浚渫を実施
1889	明治 22	町制施行で、尾崎・久保・十四日（とよひ）・土堂・東御所・西御所に分ける
		栗原沖（西御所・東御所）海面を埋め立て
1891	明治 24	11 月、山陽鉄道（現在の山陽本線）福山 - 尾道間が開通（尾道駅開業）
1892	明治 25	7 月、山陽鉄道（現在の山陽本線）尾道から糸崎まで延伸
		住友家尾道分店から住友尾道支店へ
		尾道商業会議所（現在の尾道商工会議所）開設
1893	明治 26	住友汽船部によって尾道 - 四阪島 - 新居浜を結ぶ定期航路を開設
1894	明治 27	三木半左衛門が千光寺山に共楽園（千光寺公園の前身）を築造開始
1895	明治 28	住友の重役が尾道に参集して銀行設立を決議（通称・尾道会議）
		住友銀行尾道支店開設（土堂町の住友家尾道分店地）
1896	明治 29	久保銀行浜に尾道貯蓄銀行開設（広島銀行市役所前出張所の前身）
		尾道電燈会社が開設され、尾道に電灯がつく
		尾道収税署を尾道税務署に改称
1897	明治 30	第一尾道尋常小学校として後の久保小が現在地に移転
		尾道－今治航路が開設
1898	明治 31	尾道市制施行（県下で 2 番目）
		地元の新聞として「黄陽新報」（現在の山陽日日新聞）創刊
1899	明治 32	尾道港の浚渫工事が完了
		尾道税関監視署新設
		三木半左衛門が千光寺山に共楽園（千光寺公園の前身）を完成させる。35(1902) 年に尾道市へ寄付
1900	明治 33	第二尾道尋常小学校として土堂小学校開校
1901	明治 34	尾道港の浚渫を再開（以後、11 年間に及ぶ）
1903	明治 36	山陽鉄道による尾道－多度津航路就航
1904	明治 37	住友銀行尾道支店が久保米場町へ新築移転
1905	明治 38	尾道塩務局（後に専売局尾道収納所）開設
1906	明治 39	尾道に電話開通。当時の市内加入者は 141 人。
		私立の図書館が久保町勧商場に開館。後に市立図書館へ引き継がれる。
1908	明治 41	第三尾道尋常小学校として長江小学校開校
		市立高等女学校（現在の県立尾道東高校）開校
1909	明治 42	四阪島の煙害問題を協議する為の場が千光寺山中腹に位置する島居家の茶園を借りて開かれる（第二の尾道会議）。翌年に賠償問題解決。
1911	明治 44	尾道－高浜（愛媛県松山市）航路開設
1913	大正 2	尾道港が新居浜の住友肥料製造所から運ばれる荷揚げ・捌き場に。日立造船向島工場の前身となる水野ドック創業
1914	大正 3	私立の図書館が市へ移管され尾道市立図書館（現・中央図書館）開館
1920	大正 9	尾道出身の実業家・山口玄洞の寄付で、尾道市実業補習学校（後の明徳商業・明徳高校、現在の市立尾道南高校）が開校
		筒湯小学校開校
1921	大正 10	尾道で初めて自動車が走る
1922	大正 11	尾道貯蓄銀行が尾道銀行へ改称し、久保米場町へ移転
		尾道市職業紹介所（現在のハローワーク尾道）開設
1923	大正 12	山口玄洞の寄付金を得て、尾道市上水道敷設工事が着手される
		尾道銀行本店開設（後に広島銀行へ吸収）
1925	大正 14	上水道敷設が完了し、市内に給水開始
		尾道－市村（御調町市）を繋ぐ尾道鉄道開通
		旧制尾道中学校（現在の県立尾道北高校）開校

尾道市土堂一丁目8番8号　TEL　0848(20)0400　開館時間10時～18時　木曜･年末年始休館